

開運！ 結城七福神めぐり2024

七福神詣と七福神



七福神詣とは、新年に七福神の神社や寺院に福德を祈るために参拝してまわることです。七福神は、幸福と財宝を与える七柱の神のことで、一般的には、恵比寿(夷など)・大黒天・福祿寿・毘沙門天・布袋・寿老人・弁財天のことをいいます。このうち福祿寿と寿老人は、同じであるとして寿老人を除いて吉祥天を加えたこともありましたが、もとは福神として個別に信仰されていたものを「七」という縁起の良い数(聖数)にあてて、ひとまとめにしたのが七福神であり、定着したのは江戸時代の後期です。

「宝船」は、米俵・千両箱・打出の小槌などの宝貨を積んだ帆掛け舟に七福神を描いた縁起物で、正月2日の夜、初夢に宝船の絵を枕の下に入れ、吉夢をみるという風習があります。

結城七福神の寺社と福神

1. 金光寺(キンコウジ)と寿老人(ジュロウジン)

金光寺は、慶壽山金光寺といい、真言宗豊山派のお寺です。開山は正治2年(1200年)結城初代朝光公が当地に観音堂を建立し「聖観世音菩薩」を祀り、同公の守り本尊としたと伝わっています。本堂の建立は結城家12代持朝公によって行われたことが寺伝にあります。享保18年(1734年)に再建され、昭和58年(1983年)に改修されました。山門の梁に結城家の財宝のありかが秘められるといわれる三首の和歌が刻まれています。



金光寺の福神は寿老人です。寿老人は、福祿寿と同じく星の化身で、にこやかな微笑みをたたえ、手には巻物を括り付けた杖、そして団扇や桃などをもち、鹿を従えた姿が一般的に知られています。団扇は難を払い、桃は長寿のしるしで、鹿もまた長寿の象徴である。長寿延命、富貴長寿の神として信仰されています。

2. 市杵島神社(イチキシマジンジャ)と弁財天(ベンザイテン)

市杵島神社の祭神は市杵島姫命で、弁天島の地に天正19年(1591年)に創建されました。この女神は、福岡県の宗像神社の祭神の宗像三柱の一柱です。この神が日本に仏教が伝えられたとき神と仏が調和すること(神仏習合)で、弁財天にあてられました。



市杵島神社の福神は弁財天です。弁財天は、七福神の中で、唯一の女神で、元はインド河(水)の神であったが、やがて音楽の神、言語の神となり日本に伝わった当初は、弁才天と呼ばれました。その後、財宝・芸術に関係深い吉祥天の性格が吸収され弁財天といわれるようになり、財宝を授けてくださる神へと変わったものです。知恵財宝、愛嬌縁結びの徳があるといわれています。その姿は、本来は八つのひじ(八臂)をもち、弓・矢・刀・金剛杵(もとはインドの武器)などを持っていましたが、のちに二つのひじ(二臂)となって、琵琶(楽器の一つ)を手で奏でる形が多くなりました。(当社の像容は前者で、市指定文化財です。)弁財天像は孝顕寺に保管されています。

3. 毘沙門堂(ビシャモンドウ)と毘沙門天(ビシャモンテン)

下総州結城絵図(享保19年(1735年)に多聞寺毘沙門堂とあります。元は多聞寺と称した寺院であったらしいが、明治の初年廃寺となり光福寺境外仏堂として残ったものと思われます。成立は、1735年以前と考えられます。現拝殿は、明治27年(1894年)再建されました。



毘沙門堂の福神は毘沙門天です。毘沙門天は四天王(四方にて仏法僧を守護する四神)の一人、多聞天のことで、単独で祀られる場合は、毘沙門天と呼ばれます。中世を通じて福の神として信仰されています。江戸時代以降は勝負事に利益ありとあがめられています。七福神では、融通招福の神として信仰されています。鎧兜を身につけ、左の掌に宝塔をのせ、右手には三叉の矛を持ったインドの神で、当社の毘沙門天立像は市指定文化財です。毘沙門天立像は、光福寺に保管されています。

4. 健田須賀神社(タケダスガジンジャ)と大黒天(ダイコクテン)

健田須賀神社は明治3年(1870年)に健田神社と現在地にある須賀神社が合祀されました。

健田神社は、古代より市内健田の地に建てられ我が国の最古公式記録集「延喜式」に勅撰され東国地方を平定したとされる竹田臣の祖、武渟川別命を祀っています。

須賀神社は牛頭天王ともいい、疫病を払う神、須佐之男命を祀り、結城家初代朝光公により仁治3年(1242年)に創建されたと伝えられ、結城家第一の氏神として歴代の城主の崇敬篤く、七代直朝公が結城七社を定めその一つとなりました。



健田須賀神社の福神は大黒天で境内社の甲子大黒天に安置されています。大黒天は神道では大国主命と仏教の大黒天が習合し、左肩には財宝の入った大きな袋、右手に打ち出の小槌を持、足元には米俵といった姿で親しまれています。因幡の白兔の神話でも知られています。五穀豊穡、商売繁盛、金運上昇、運氣上昇、縁結びなどのご利益があるといわれています。

当社の甲子大黒天像は、明治頃のものと思われるが、大正時代は縁日には大変賑やかで屋台が出て手踊りを奉納した記録があります。

5. 蛭児神社(エビスジンジャ)と蛭児(エビス)

蛭児神社の創立された時期は不明ですが、宝暦6年(1756年)再建されたという記録が残っています。拝殿は、明治29年と平成20年に改修されています。この神社の登記上は漢字で「蛭児神社」と書き、読みは「えびすじんじゃ」と読みますが、「えびす」はいろいろな漢字があてはめられて、夷、戎、胡、恵比須、恵比寿、恵美須、恵毘須、蛭子、蛭児などと表記されています。



蛭児神社の福神は蛭児です。蛭児神社の祭神は大国主命の子である事代主命です。事代主命の尊称が「えびす」なので蛭児神社といえます。「えびす」は、古くは「大漁追福」の漁業の神でした。時代と共に福の神として「商売繁盛」や「五穀豊穡」をもたらす商業や農業の神となりました。七福神のなかでは唯一日本由来の神様です。その姿は、風折烏帽子を着付け、鯛を左わきに抱え、右手で釣竿をもっているのが一般的です。

6. 大輪寺(ダイリンジ)と布袋(ホテイ)

大輪寺は如意山観音院大輪寺といい、真言宗豊山派の寺院です。創建年は不詳ですが、創建時は、常陸国河内郡田河原にあって大輪坊といわれました。慶長3年(1598年)頃に現在地に移されました。

現本堂は平成3年(1991年)建替えられました。観音町にあった境外仏堂である人手観音堂が、令和2年(2020年)大輪寺境内に移されました。人手観音堂と共に移された石造布袋像があります。



大輪寺の福神は布袋です。布袋は、庶民には福の神の一種として信仰を集め、室町時代後期には七福神に組み入れられるようになりました。

弥勒菩薩の化身といわれ、いつも笑顔を絶やさず人々に接していた人で、大きな袋には宝物がいっぱい入っていて、信仰の厚い人に与えられたといわれます。笑門来福、夫婦円満、子宝の神として信仰が厚くなりました。

7. 乗国寺(ジョウコクジ)と福祿寿(フクロクジュ)

乗国寺は見龍山覚心院乗国寺といい、曹洞宗の寺院です。かつて(1440年以前)は鬼怒川と田川に挟まれた常陸・下野・下総の境にあって号を三国山と称し、寺名を福巖寺といいました。文明11年(1479年)鬼怒川の大洪水で寺地が流出し、結城14代氏広が現在地に移し、見龍山覚心院乗国寺と改称し再興しました。本堂は文久元年(1861年)に再建されました。



乗国寺の福神は福祿寿です。福祿寿は、名前は、幸福の福、身分をあらわす禄、寿命を表わす寿の三文字からなり、中国、道教の長寿神です。南極老人星の化身であり中国の村や町に住み、人々の信仰を集めたといわれる仙人です。長い頭、長い顎鬚、大きな耳たぶをもち年齢千歳といえます。長寿、幸福の徳を持ち、鶴と亀を連れて、左手に宝珠、右手に巻物を括り付けた杖をもつ姿が特徴です。招徳人望の神様として信仰されています。